

『雨月物語』「夢応の鯉魚」における鯉魚の放生について

台湾大学日本語文学系 修士二年 包祐寧

要旨

本報告は、放生を「夢応の鯉魚」の主なモチーフとして認識し、この一編における放生の動機や影響を再検討するものである。物語冒頭の「獲たる魚をもとの江に放ちて」、海若の詔による「放生の功德」、終末の「残れる鱒を湖に捨てさせけり」、「画くところの鯉魚数枚をとりて湖に散らせば」、これらの行動はすべて「放す」という行いと連結し、鯉魚の解放はこの蘇生譚の原因であり、また最後の結果でもあった。この一編は実に首尾一貫な物語である。

冒頭と結末における放生行為を注目し、主人公興義が見た二回の夢と合わせて考えれば、前者は理想的な鯉魚の生き方を想像し、画を描くのに対して、後者は生々しい夢を通じで、鯉魚としての辛さ、いわば現実的な一面を表しているだろう。故に描いた鯉魚が一層神妙になり、命を得て紙面を離れたのであろう。主人公自身も鯉魚となって色々経験したこの一編は、ただ想像上のロマンを追求するだけではなく、現実を理解した上で、現実と非現実の境界を超え、新たな芸術性にアプローチしようとする一面も、確実にあるのではないか。